

せっかち 園長の ひといごと

2015、10、30

認定こども園あかみ幼稚園・メイプルキッズ 統括園長 中山昌樹

保護者の皆さんのおかげで、運動会（3・4・5歳）、そしてミニミニ運動会（0・1・2歳）では、子どもたちの成長を大人たち（保護者・保育者）みんなで確認し、喜び合うことができました。

そこで『子どもたちの成長・・・』と言った時、その多くは、「入園した頃を思い出すと、こんなこともできるようになったのか！」という、見た目にわかりやすい成長の姿だったと思います。ですが時には、見た目ではマイナスに見える姿も、発達（育ち）のプロセスでは、見られます。

例えば4歳になり（個人差は、当然ある）、自分の「周りの世界」が今までよりも良く見えるようになると、運動会当日、多くのお客さんが来ていることに気付く。けれど、残念ながらそのことがプレッシャーとなり、泣いてしまう（あるいは、ふざけてしまう、暴れてしまう・・・）

で、3歳の時には（個人差は、当然ある）泣いてしまうようなことがなかったとすると、保護者の皆さんは「どうして？」と思いますよね。

ここでこれを、発達（育ち）のプロセスから見ると、3歳の時に泣かなかったのは、自分の「周りの世界」がまだよく見えないからだとと言えるのです。

仮に、3歳児の視野が半径数メートルだとすると、運動会当日でも、それまでの日々の保育であっても、自分の周りの楽しい世界はいつも通りなんですね。



そして、5歳では（個人差は、当然ある）、これが本番に強い。・・・当日にお客さんがたくさんいることが逆に、「よーし、リレーがんばるぞ！」というように、やる気にもなるのです。

そう考えると、上の4歳の姿は、発達（育ち）のプロセスで見られる、“思うようにいかない時期”なのですね。

運動会（3・4・5歳）、そしてミニミニ運動会（0・1・2歳）では、そのようなリアルな子どもの育ちを、確認し、喜び合うことができたのだ、と思うのです。発達（育ち）のプロセスって、リアルで奥が深いものなのですね。 ご協力、ありがとうございました！

さて、運動会の話の続きです・・・“我慢”について・・・

10月10日の運動会（3・4・5歳）にいらした方は、子どもたちが我慢して頑張る姿を、とくに5歳児（年長・もり組）の様子から感じたのではないのでしょうか。今回はここで、皆さんと、子どもの我慢について考えたいと思います。

年長のもり組の種目は、親子競技を除くと、クラス対抗リレー、クラス対抗タイヤとり、組体操（かっぱのファンタジー）。リレーとタイヤとりは「クラス対決」で、子どもたちは当日の前も、当日の後も、ときには負けて悔しい思いをしながらも、何度もリベンジ戦を行い、勝った喜びもあわせて感じてきました。

ここには、ときには負けて落ち込むけれど、仲間と もう一度チャレンジする・・・先生に「もう一度やれ」と言われてやるのではなく、「チャレンジしたいから、チャレンジする」という、子どもたちの、我慢・忍耐・耐性を見ることができます。

一方組体操では、子どもたちは「かっぱに会いたい」というイメージで、その気持ちを仲間と身体で表現しました。・・・例えば、6人組のピラミッド（一山ずつ大人がついて安全確保）では、『水の神様』表現しましたが、上に乗る子どもは落ちそうになり、下の子どもは膝が痛くなり・・・など、けっこう大変な試練に遭遇しました。ですが、「仲間と一緒に、かっぱの物語を表現したい」という、子どもたちの強い気持が、怖さや痛さを乗り越えさせたのです。

ここでも、子どもたちの中に、やりたいこと（かっぱの物語を表現）をやるための 我慢・忍耐・耐性が、しっかり育っていると感じるのです。言葉を変えると、子どもたちが心の中に育てたのは、意味のある我慢（あるいは理由のある我慢）なのです。

しかし残念ながら、世の中には、子どもに理由のわからない我慢をさせようとする風潮がありますね。例えば、「とにかく、ダメなものはダメなんだ。」「理由なんてどうでもいい、大人の言うことを聞くのが子どもだ。」など。

しかし、私たち大人でもそうですが、意味のない我慢（理由のわからない我慢）を強いられることほど、つらいものではありません。理由のわからない我慢は、人の心を弱くする・・・反対に、理由のある我慢は心を強くする、と思うのです。では子どもに願うべき 本当の我慢というのは、どちらの我慢なのでしょう？ 皆さんは、どちらの我慢を 我が子に求めますか？



我慢の話の続き・・・「あめ と むち（飴と鞭）」について・・・

もう一つ、話のついでにお伝えします。それは「あめ と むち」について。これは、大人が子どもに理由のわからない我慢を強要するとき、あるいは、大人が子どもを思うように動かしたい時に、よく使う手段なのです。

言わなくてもわかると思いますが、「あめ」は「飴」、要するに、ごほうびです。そして「むち」は「鞭」、これは、おしおき（罰）ですね。そしてこの2つを使い分けるのが、「あめ と むち」です。どのような感じかということ・・・大人がしてほしいことを子どもがしない時、おしりを叩くなどして、おしおき（罰）する・・・「理由なんてどうでもいい、大人の言うことを聞くのが子どもだ。」と。そして、大人がしてほしいことを子どもがした時には、おもちゃを買ってあげるなどして、ごほうびを与える。

「あめ と むち」で、子どもに何が育つと思いますか？・・・そこで子どもに、「なぜ、そのことをした方がいいのか」あるいは「しない方がいいのか」という、判断力（自制心、あるいは本物の我慢）は育つのでしょうか？

残念ながら、ここで子どもに育つものは、あまりないと考えます。あるとすれば、おしおき（罰）は嫌だ・ごほうびがほしい・・・つまりこれは、怒られたくない・ほめられたいという、**反射** です。

反射というのは、頭（脳）で考えて行動するものではありません。例えば、熱いものに手が触れた時、それこそ反射として人間は手を引込みますが、その行動は頭（脳）で考えて行っていません。専門的には、これを『無条件反射』と言います。

反射にはもう一つ、『条件反射』というものがあります。これは、梅干を見ると唾が出るというようなもので、「パブロフの犬の実験」でも有名です。 [パブロフの犬の実験] 犬にベルを聞かせ、えさを与える（犬は唾液を出す）→ これを繰り返す→ 犬はベルを聞いただけで唾液を出す。

私は、子どもに対する教育・保育が、このような反射にならないことを願います。 **考え過ぎかもしれませんが、私は、無理やり何かを子どもにさせる行為・・・あるいは、意味のわからない我慢をさせる行為に、動物の調教を連想してしまいます。**

どんなに小さい子どもでも ひとりひとりに 人としての尊厳がある！

相手（子ども）を大切にし 保育者の思い・気持ちが 伝わる 伝え方を工夫しよう！（本園職員の「心得」より）

今回最後の話題です・・・

ここでは園での投薬について、再びお伝えします。



☆まずは、「ひとりごと」6月号より・・・

本日の「衛生だより」にもありましたが、園での『投薬依頼』の件数が年々増え、今現在、職員の負担が大変大きくなっている状況があります。おそらく保護者の皆さん一人一人からは、園全体で『投薬』がどのくらいの負担になっているのか、想像できないと思われます。ですがこれだけ依頼の人数が増えますと、職員には、**一人一人のお子さんに飲ませることの物理的負担だけではなく（これはこれで、薬の種類も飲ませ方も多様なので大変です）、間違って飲ませてはいけないという心理的な負担が大きくなるのしかかってくるのです。**

もちろん以前の「ひとりごと」でも言いましたが、「病気に負けない身体」を作れることを前提に**いざとなったら薬は必要と考えています。しかし、**園長として職員のこれ以上の負担は何としても改善したいと思うのです。それは、職員自身の健康管理ということもありますが、それを前提に、とくに担任**保育者には、子どもたちと元気に思いっきり遊んでほしいと考えるからです！**

☆次に、改めてこの発言の意図をお伝えすると、

私は、職員から投薬の負担を減らし、その分の時間とエネルギーを 子どもや保育に向けてほしい、です！

☆要するに、ここで目指したいのは、子ども・保育へのメリットです。

- 本当に必要な薬は、園でも飲んだ方がいい。
- 保育がある日中は処方しなくて済むということであれば、園で投薬を減らすことの、子どもへのデメリットはない。
- 投薬を減らすことで、職員・保育者の子どもへの関わりがより増やせれば、これは子どもにとっての大きなメリット。
- このことで、結果的には、保護者の皆さんも安心する。

☆12月5日（土）の保護者会理事会の後に、投薬についてのミーティングを行う予定です。これは役員さん以外の参加も可です。懇談会やお手紙などで、またお知らせします。たくさんの皆さんの参加をお願いします！